

Title	カーシュガル・ハーン家とベグ達 : 17 世紀中葉の東 トルキスタン
Author(s)	澤田,稔
Citation	待兼山論叢. 史学篇. 1982, 15, p. 3-22
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/47992
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

カーシュガル・ハーン家とベグ達

---17世紀中葉の東トルキスタン ----

澤田稔

はじめに

15世紀中葉から16世紀初に亘り、中央アジアの草原地帯においてウズベク・カザフ・キルギズ・オイラトら遊牧諸勢力が興隆し、チャガタイ・ハーン家の系譜を引くモグーリスターン・ハーン家のハーン達は、その情勢下セミレチェの草原地帯からタリム盆地オアシス地帯へ移動した。彼らはトゥルファーン方面とタリム盆地北辺に遷ったが、1514年にカーシュガルに進出したサーイード・ハーン Sa'fd Khān の子孫、すなわちカーシュガル・ハーン家は16世紀の末にトゥルファーン方面に東進し、タリム盆地オアシス地帯のほぼ全域をその支配下に置いたのである。以後カーシュガル・ハーン家はヤールカンドを中心とする西部ハーン家とトゥルファーン方面の東部ハーン家に事実上分裂した。そして、後者のアブドゥッラー・ハーン'Abd Allāh Khān は17世紀中葉に西部ハーン家を圧倒し、ヤールカンドに進出してタリム盆地西半部を手中に収めた。彼は以後ほぼ30年間ハーン位にあり、歴代カーシュガル・ハーンに比較して長い治世を誇ったのである。

17世紀中葉の東トルキスタンにおいては、カーシュガル・ハーン家とイスラーム神秘主義教団であるカーシュガル・ホージャ家とが支配層の最上層に位置していたと考えられている¹⁾。しかし、両者の政治権力の実態は具体的に十分解明されていない。本稿は前者カーシュガル・ハーン家の政

治力についてその具体相を提出する事を目的にしている。すなわち、 G. Raquette 氏紹介の所謂「ワクフ文書」がアブドゥッラー・ハーンの子によって発布された敕令である事を確認し、その歴史的位置づけを行ない、当時の時代背景を政治史的に跡づけたいと思う。

ここで、本稿第Ⅱ章の主要な史料的根拠となる《シャー・マフムードの 歷史》(仮題) Shāh Mahmūd bin Mīrzā Fādil Chorās Tārīkh~ Ta'rīkh-i Shāh Mahmūd bin Mīrzā Fādil Jorās(仮題)(引用箇所はTShM の略号で示す)の史料的価値について述べておきたい。この史料の存在は ソ連邦研究者の引用・部分訳*等により夙に知られていたが、その利用に便 ならざる所があった。然るに、近年 О.Ф. Акимушкин 氏は史料学的研究と 訳文・訳注等を付けて、その校訂テキストを公刊し、利用の便に供した。。 《シャー・マフムードの歴史》に引かれた最後の日付は、アブドゥッラー・ ハーンの2代後のハーン, イスマーイール・ハーン Ismā'īl Khān がヤー ルカンドで即位したヒジュラ暦1080年 dhū al-qa'da月11日月曜日 / 西暦 1670年4月2日である(TShM, p. 99)。 Акимушкин 氏の研究に依ると, 同 史料は1673年初頭から1676年夏までの間に書かれたり。作者は、同史料に明 言されている通り(TShM, p.9), Shāh Mahmūd ibn Mīrzā Fādil Chorās である。彼の生没年は知られないが、17世紀20年代に生まれ、70-80年の 生涯を過ごし、ヤールカンドで逝去したと考えられるり。作者の父 Mīrza Fādilはアブドゥッラー・ハーン即位以前にその活動が伝えられ、同ハ ーン治世下、右翼のクシュ・ベギ qush-begi とウチ・ベギ uch-begiであ ŋ゚, バールジュークBārjūq (バルチュク)の知事(hākim)であった(TShM, pp. 63, 64, 70, 71)_o

以上の事実より考えて、作者シャー・マフムードが、本稿で論ずるアブ ドゥッラー・ハーン治世下の諸事象を見聞し、支配層の動向を知悉し得た であろう事は想像に難くない。その意味で、《シャー・マフムードの歴史》 は同ハーン時代の諸事件を考察する上で信頼性の高い情報を提供していると言えよう。但し記事に年代が殆ど明示されておらず(アブドゥッラー・ハーン治世の記事で絶対年代が明記されているのは4箇所である),利用に注意を要する。

I **1662年の敕令**

本稿で扱う「敕令」とは、G. Raquette 氏がその写真版を付し、内容を紹介した一枚の文書であるⁿ。それは、領事ペトロフスキー時代のロシアのアク・サカルが遺した書類の中にあったもので、1914年にカーシュガルにおいて Raquette 氏の手に入ったものである⁸。同氏はこの文書をワクフ設定証書 waqf nāma と理解しようとしたが、その根拠⁹は薄弱である。F. Giese氏は彼の訳文・トランスクリプションの誤りを指摘して全訳を提示し、その所説を批判した¹⁰。続いて A. K. Боровков 氏は、この文書が君主への奉仕に対する恩賜を内容とするヤルリグである事を指摘した¹¹。

以上の学説を踏まえて、この文書の発布者・発布時期・発布地・内容の 骨子について検討しよう。尚、以下では、Raquette 氏公表の上述の写真 版を「敕令」と称す。「敕令」は次の2行に亘る表題で始まる¹²⁾。すなわち、

我父ハーン陛下の敕令による, Abū al-Ghāzī Yōlbārs Bahādur Khān Ghāzī, 我の言葉¹³⁾

と「敕令」1・2行目に3行目以下の文字より大きな文字で記されている。 この表題が「敕令」の発布者を表現している事は、B. B. Бартольд 発見の 「シグナクの敕書」や Tārīkh-i Amnīya所載のヤルリグ¹⁴⁾や後述のシャバ ーニー朝のハーン、アブドゥル・ラティーフのヤルリグの表題から見ても 疑いない。また、それらの文書の表題はヤルリグに通例の¹⁵⁾「我々の言葉 (sözümiz~sözimiz)」で結ばれており、「敕令」の「我の言葉(sözüm)」は それに対応すると考えられる。 さて、それらの文書の表題において、「我々の言葉」はその文書の発布者の名前のすぐ後に続けられている16。それ故に、「敕令」の発布者は Abū al-Ghāzī Yōlbārs Bahādur Khān Ghāzī と見做される。更に、Raquette 氏は「敕令」本文上2箇所に捺された同一の円形印章の銘文を Yōlbārs Bahādur Khān bin... 'Abd Allāh Khān と判読している17。 写真版ではその文字が明瞭でないが、発布者を裏付けるものと理解して良いだろう。そして、「我父ハーン陛下の敕令(yarlīgh)による」と明示されているように、この「敕令」は「父ハーン陛下の敕令」に基づいてその子により発布されたのである。

次に、発布の時期と場所を確認しよう。「敕令」は次の文言で結ばれる。 捺印された崇高なる命令(nishān)は1073馬の年safar 月に王権の在処 Kāshghar 地方(wilāyat)にて記された¹⁸。

つまり、「敕令」 はヒジュラ暦1073年 safar 月 (西暦1662年9月15日から10月13日までに相当) にカーシュガル地方において発布されたのである。

さて、Raquette氏は「敕令」の内容をサイフゥッラー・ベグなる人物にカーシュガル北方のBeschgräm村付近の土地の寄進を命じたものの如く理解した¹⁹。しかし、Giese氏はその解釈を否定し、サイフゥッラー・ベグは寄進者でなく、水と土地の権利の受領者である事を立証した²⁰。Giese 氏の所説はBopobkob氏に支持され²¹、更に前述したように、「敕令」が君主の恩賜を内容とするヤルリグである事を、後者は明らかにした。「敕令」に

Yārbālīgh 幹渠(östäng)の1枝渠(arïq)の水を,我々は恩賜(soyūrghāl)した。そしてまた我々は,代々私有されている,境界と区分の知られる1区画の土地もその私有権(milklik)に同意し,承認し……与えた²²。

とある。Raquette 氏の解釈は誤りであり、 筆者は後者二氏の解釈を支持

する。尚,Yārbālīgh はカーシュガル河 (テュメン) 北方 Beschgräm近郊 の Yārbāghlīgh (~Yārbāghlīq) に推定される²³⁾。

水を恩賜され、土地の私有権を認められたこの人物の名を、Giese 氏はSeifullahbegčurと転写し、最後の čur を称号の如くに理解しようとした²⁴⁾。同氏が指摘するように、「敕令」11行目に Seifullahbeg に続いて ChWRASと記されている事は明瞭である。Fuad Köprülü氏と Bopobkob氏はそれを「チュラス」と読み、人名の一部にした²⁵⁾が、筆者はその考えに左袒する。なぜならば、チョラス(~チュラス)Chorās(~Churās)がモグールMoghūl の 1 遊牧集団であり、その出自の者が当時タリム盆地において活動していた事は既に間野英二氏により明らかにされている²⁶⁾からである。Chōrās(~Chūrās<ChWRAS)は Chorās の異なる写し方と考えられ、その人物名は Sayf Allāh Beg Chōrāsとされるべきである。尚、この人物の活動については後述する。

最後に、「敕令」の発布者 Abū al-Ghāzī Yōlbārs Bahādur Khān Ghāzī の歴史的位置づけを行なおう。第 II 章で詳論する通り、カーシュガル・ハーン家のアブドゥッラー・ハーンの子ヨルバルス Yōlbārsは「敕令」発布時期の1662年にカーシュガルを支配していた。「敕令」の発布者名にも Yōlbārs と見える事が注目される。では、その Yōlbārs 前後の美辞的称号を如何に考えるべきか。ここで対照すべきものは、シャイバニー朝のハーン、アブドゥル・ラティーフによって、ホージャ・アフラールの子孫への財産返還と免税に関して1544年に発布されたヤルリグ***のある。アブドゥル・ラティーフはその表題において

Abū al-Ghāzī 'Abd al-Laṭīf Bahādur Khān²ð'
と表記されている。この様な表題は上述の文書の表題にも見られる²'。「敕令」の Yōlbārs 前後の美辞的称号もそれと同様な表現である。それ故,「敕令」の発布者はカーシュガル・ハーン家のアブドゥッラー・ハーンの子ヨ

ルバルスと断定して誤りない。

以上論じた様に、Raquette 氏紹介の1662年の紀年を持つこの文書は、アブドゥッラー・ハーンの子ヨルバルスによってカーシュガルにおいて発布された軟令である。そして、その内容はサイフゥッラー・ベグ・チョラスなる人物に水を恩賜し、土地の私有権を認めた事を骨子とする。「敕令」は当時のカーシュガル・ハーン家の法的権威と、その権威により経済的利益を確保した一ベグの姿を明瞭に示しているのである。

次に、「敕令」が発布された頃のカーシュガル・ハーン家内の政治状況を 整理しよう。

Ⅱ アブドゥッラー・ハーンの治世

(1) アブドゥッラーの即位

アブドゥッラーは第4代カーシュガル・ハーンのムハンマド・ハーン Muḥammad Khānの治世以来ジャーリーシュ Jālīsh (チャリシュ,カラ・シャフル) とトゥルファーン Turfān を支配していたアブドゥル・ラヒーム・ハーン 'Abd al-Raḥīm Khānの長子である(TShM, p. 61)。アブドゥッラーは7歳の時よりミールザー・アブール・ハーディー Mīrzā Abū al-Hādī なるクーサン Kūsanの知事(ḥākim)のもとで成長し,父の死後アクスゥ Aqsū に進出した(TShM, pp. 54, 61, 62)。他方ムハンマド・ハーンの曾孫スルターン・マフムード・ハーン Sulṭān Maḥmūd Khān はヤールカンド Yārkand においてアクスゥのアブドゥッラーに対する遠征の準備をしたが,ヒジュラ暦1045 / 西暦1635-36年に逝去し,その兄スルターン・アフマド・ハーン Sulṭān Aḥmad Khān が彼を継いで,ハーン位に即いた(TShM, p. 62)。

アブドゥッラーはカーシュガルに向かい、スルターン・アフマド・ハーンと対決し、敗れてアクスゥへ帰還したが、トゥルファーンから次弟アブ

ール・ムハンマドAbū al-Muḥammad をアクスゥへ呼び出し、一緒にカーシュガルへ軍を率いた (TShM, pp. 62, 63)。スルターン・アフマド・ハーンは、多数の武将達 (umarā') がアブドゥッラーの味方をしている事を知り、バルフ Balkhへ逃げ、ジャーン朝のイマーム・クリー・ハーン Imām Qulī Khān の支援でカーシュガルに軍勢を率いようとしたが、その途上アンディジャーン Andijān の人々と合戦して殺された (TShM, p. 63)。一方、アブドゥッラーはスルターン・アフマド・ハーンの逃亡後ヤールカンドに入り、カーシュガル・ホージャ家のホージャ・ムハンマド・ヤフヤー Khwāja Muḥammad Yaḥyāの出迎えを受け、ハーン位 (khānī) に即いた (TShM, pp. 63, 64)。それはヒジュラ暦1048/西暦1638—39年の事であった (TShM, pp. 65)。

(2) カーシュガルのヨルバルスとホタンのイブラーヒーム

アブドゥッラー・ハーンは即位後カーシュガル,ヤンギ・ヒサール Yāngī Ḥiṣār,アクスゥ,ウチ Uch,バミール高原中のサリグ・コル Sārīgh Qōl,ホタン Khotan,ホタン地方の町カラ・カシュ Qarā Qāsh 各地の支配権をベグ達や自らの子弟にそれぞれ委ねた。すなわち、《シャー・マフムードの歴史》はハーンの即位に続けて次のとおり記す。

[アブドゥッラー・ハーンは] カーシュガルの支配権 (ḥukūmat) をSubhān Qulī Begに定めた。Mīrzā Shāhid Chorāsをヤンギ・ヒサールへ支配者として(be-ḥukūmat) 派遣した。 アクスゥの支配権 (imārat)をMīrzā 'Abd al-Sattār Begに託した。 ウチの支配権 (ḥukūmat)をMīrza Kūchik Chorāsに与えた。[中略] サリグ・コルを Mīrzā Shahbāz Chorāsに委ねた。イブラーヒーム・スルターン 陛下 Ḥaḍrat-i Ibrāhīm Sulṭānをホタンの国の統治(salṭanat-i mamlakat-i Khotan)に任じた。Muhammad Mansūr Beg を彼の師

傅(ataliq)にした。'Arab Begをカラ・カシュの町(qaṣaba) に派遣 した (TShM, p. 64)。

アブドゥッラーの第三弟(TShM, p. 61) イブラーヒームがホタンの国の 支配者になった事が判明するが、カーシュガルの支配者について補足せね ばならない。

その記事に明示されている通り、カーシュガルの支配権を得たのはスプハーン・クリー・ベグであったが、アブドゥッラー・ハーンの子(TShM, p.61) ヨルバルスについて同史料は

[∃ルバルスは]8歳の時にカーシュガルの支配 (imārat) に定められ、30年カーシュガルにいた (TShM, p. 85)。

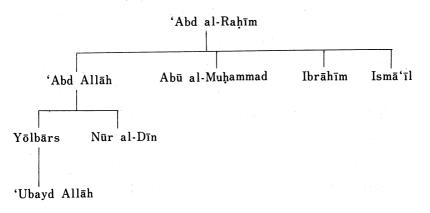
と伝えている。ヨルバルスのカーシュガル支配の開始時は,先に整理した父アブドゥッラーの即位事情から考えて,その即位時以前に遡り得ない。更に,ヨルバルスは後述する父のヒンドゥースターンへの逃亡後,叔父のイスマーイールと争い,ヤールカンドを手中に収めて即位した(TShM, p. 93)のである。それ故,ヨルバルスがカーシュガルを支配した30年間はアブドゥッラーの在位期間(1638~39年~1668年頃,後述)に相当する。かくの如く,アブドゥッラー即位時のカーシュガルの支配者としてスブハーン・クリーとヨルバルスの2名が確認される。《カーシュガル史》に依ると前者は後者の師傅であり,カーシュガルの知事であったのである。

(3) アブドゥッラーの子弟との内訌と退位

イブラーヒームはホタンを、ヨルバルスはカーシュガルをアブドゥッラーの即位以後支配していたが、その治世の末期に彼との内訌が生じた。以下にその抗争とアブドゥッラーの退位に至る経緯を跡づけよう。

イブラーヒームはキルギズQïrqīzへの遠征において活躍したが故に長 兄アブドゥッラーに恐れられた。アブドゥッラーはイブラーヒームと第四

[表] カーシュガル・ハーン家略系図



弟 (TShM, p. 61)イスマーイール Ismā'īl を追放する旨の敕令 (yarlīgh)を 発し,その結果,両兄弟は長兄の敕令に従いホタンからジャーリーシュに 向かった(TShM, pp. 68, 69)。

《シャー・マフムードの歴史》はこの事件の年代を記していないが、清朝史料に拠ると、次の如くに限定される。「欽定外藩蒙古同部王公表傳」巻110³²)、順治12年の条に、葉爾羌(<Yārkand)の表を齎した克拜なる人物の言葉として、阿都喇汗(<'Abd al-Rahīm Khān)³³)の9子の列挙中に「伊卜喇伊木居和闐」とある。伊卜喇伊木は Ibrāhīm、和闐は Khotan の音写に他ならない。克拜の言葉は順治12(1655)年頃の状況を伝えていると理解されるから、イブラーヒームがホタンから追放されたのは1655年頃以降と見做される³⁴。

さて、イブラーヒームはホタンから追放された後カルマク Qalmāq と接触した。 アブドゥッラー、ヨルバルス父子がナリン Nārīn河上流域アト・バシ Āt Bāshī にいたカルマクに対して遠征した時、イブラーヒームはカルマクのイェルデン・タイシ Yeldāng Tāyshī の子 Chūjkīn と共にアクサイ Aqsāy においてその父子に敵対した (TShM, pp. 78, 79)。

その後イブラーヒームは弟イスマーイールと共にジャーリーシュ方面に居たと思われ、イブラーヒームの行動に動揺したアブドゥッラーはジャーリーシュ、ユルドゥズ Yūldūzへ軍を率いた。しかし、イブラーヒーム、イスマーイール両兄弟とカルマクのセレン Sereng、イェルデン・タイシ等はアブドゥッラーとその子 (TShM, p. 72) ヌールゥッディーン Nūr al-Dīnの軍勢の混乱に乗じて、両者を敗走させた (TShM, pp. 79-81)。 ホタンから追放されたイブラーヒーム、イスマーイール両兄弟は、ジャーリーシュ、ユルドゥズ方面においてカルマクのイェルデン・タイシとセレンの軍事的援助を背景にアブドゥッラーを脅かす勢力になっていたのである。

次に、カーシュガルを支配していたヨルバルスとアブドゥッラーとの抗争を見なければならない。1666年頃、ヨルバルスは父アブドゥッラーに対して叛乱を企てた。その頃、ケリヤ Keriya までのホタンの国(mamlakat)はヨルバルスの子ウバイドゥッラー 'Ubayd Allāh に恩賜(soyūrghāl) されていて、バールジュークとサリグ・コルもヨルバルス自身のものであり、アブドゥッラーには、ヤールカンドの城市(shahr)以外に勢力下の所は残っていなかった (TShM、p. 86)という。ヨルバルスは、アブドゥッラーを国から追い出そうという内容の手紙をヤールカンドのベグ達に送ったが、ベグ達はそれに即応せず、一部のベグ達がアブドゥッラーに報告した。その結果、アブドゥッラーはヒジュラ暦1076年 shawwāl月7日土曜日/西暦1666年4月12日に人々を集め、日曜日にヤールカンド城市(shahr)内の広場(chārsū)においてティーニー・ベグTīnī Begとナキー・ベグNaqī Begなる二人のベグを剣であの世へ送り、月曜日にヨルバルスの娘ハーンザーダ・ハーニム Khānzāda Khānīmを殺害し、ホタンのウバイドゥッラーに人を派遣して彼を殺した (TShM、pp. 86, 87)。

ヨルバルスの父アブドゥッラーに対する叛乱は、後者によるティーニー,

ナキー両べグとヨルバルスの娘・息子の殺害という局面を迎えたが,この 事件のその後の展開を見る前に,叛乱に至った父子の対立を跡づけておき たい。

その対立が生じたのは、ジューン・ガルのセンゲがケリヤに来攻した時 の事であった。先ず、その来攻の顚末を述べておこう。

SengeはGhāldāmā³⁶ [のカーシュガルでの略奪] を妬んで,ケリヤ攻撃に出て,5千の選ばれた勇者達と共にケリヤに来た。Khudāy Berdī Begがケリヤの知事 (ḥākim) であり,人を [アブドゥッラー・] ハーンに遣った。しかし,敵がセンゲであるのか,別の者であるのかは,まだ知られていなかった。 [アブドゥッラー・] ハーンはヤールカンドの軍と武将達(umarā')の一団を援助に派遣した。ウバイドゥッラー・スルターンはホタンの軍と共にホタンから出立した(TShM, p. 84)。

センゲはホタン軍の動向を知り、ケリヤを去った。アブドゥッラーとカーシュガルのヨルバルスはケリヤに急行してホタン軍と合流し、前進してニヤーNiyāに到り、センゲに対し進軍して激しく戦った。結局、双方は和議を結び、戦闘は終わった(TShM, pp. 84, 85)。

このセンゲのケリヤ攻撃の時期は、ホタンから出撃したウバイドゥッラーの経歴により限定できる。《シャー・マフムードの歴史》は第50話「ヨルバルス・ハーンの子ウバイドゥッラー・スルターンの事蹟の始まりについて(上点——引用者)」において

[アブドゥッラー・ハーンは] ウバイドゥッラー・スルターンをホタン の支配(imārat)に任じた(TShM, p. 82)。

と記し、別の箇所で、先述したウバイドゥッラーの殺害に続けて ウバイドゥッラーの統治(saltanat)の期間は4年3ケ月であり、その 生涯は18年であった。(TShM, p. 87)。 と結んでいる。同史料にはまた、彼がホタン以外の地を支配した形跡が見られず、ホタンを4年3カ月支配したと考えて誤りない。ウバイドゥッラーはヒジュラ暦1076年シャッワール月頃に殺されたのだから、彼のホタン支配の開始時はヒジュラ暦1072年ラジャブ月頃、すなわち西暦1662年2月一3月頃と計算される。故に、センゲのケリヤ攻撃の時期は1662年2月一3月頃以降1666年4月以前に限定される。

さて, このセンゲのケリヤ攻撃に対する反撃の時に, アブドゥッラー, ョルバルス父子の対立が生じた。

その〔センゲのケリヤ攻撃に対する〕遠征において〔アブドゥッラー・〕ハーンとその息子〔=ヨルバルス〕の間に冷やかな関係が生じた。それは,ヨルバルス・ハーン³⁵゚が〔アブドゥッラー・ハーンに対して〕ミールザー・ティーニー・ベグにヤールカンドの支配権(hukūmat)を,ナキー・ベグにイシク・アガ職(ishik-agha-garī)を賜うよう懇願したためであった(TShM, p. 85)。

と、シャー・マフムードは記している。この不和の原因となったティーニー、ナキー両べグは、前述した通り、後にヨルバルスが父アブドゥッラーに対して叛乱を企図した際に、彼によって殺された。ヨルバルスの叛乱に至る父子の政治的対立は、両べグに対するヤールカンドの支配権とイシク・アガ職の授与を巡る軋轢に端を発したと考えて良かろう。

ところで、父子の仲違いはカーシュガル・ホージャ家に対する両者の姿勢にも現れていた。ヨルバルスはホージャ・ムハンマド・アブドゥッラー Khwāja Muhammad 'Abd Allāh³' に敬意を払わないでいた (TShM, p. 85) という。のみならず、ヨルバルスは母方のおば、すなわちミールザー・アブール・ハーディー・メクリート Mekrīt の娘シャーフザーダ・マーヒム Shāhzāda Māhīm をアーファーク・ホージャ Āfāq Khwāja に嫁がせ(nisbatkard)、その信奉者となった (mukhlis wa mu'taqid shud) のである³³。

Tadhkirat al-Jahan la

ョルバルス・ハーンは父の言葉に従わないで、横柄な事をしていた。 Khwāja Muḥammad Yūsuf と共にホージャ・アーファークに非常に 敬意を表していた³⁹⁾。

と伝えている。

他方,アブドゥッラーは,ヨルバルスが尊敬しなかったホージャ・ムハンマド・アブドゥッラーを第三弟イブラーヒーム,第四弟イスマーイールに対するユルドゥズ,ジャーリーシュへの遠征に同行させており(TShM,p.79)⁴⁰⁾,後述のヨルバルスに対するカーシュガルへの進軍の際にも同ホージャと行動を共にしている。アブドゥッラー,ヨルバルス父子の仲違いがホージャ家に対する姿勢からも窺える事は,ハーン家の政治権力とホージャ家の宗教権威の関係を考える上で興味深いが,ここでは事実確認に留めて置きたい。

最後に、アブドゥッラーによる殺害事件のその後の経過と彼の退位について述べよう。ヨルバルスの叛乱企図に対して、1666年4月にその味方と見られるティーニー、ナキー両ベグとヨルバルスの娘・息子を殺害したアブドゥッラーは、アクスゥから子のヌールゥッディーンを呼び出し、カーシュガルのヨルバルスに軍を率いた。ヨルバルスはカーシュガルに近付いたアブドゥッラー、ヌールゥッディーン両軍に対して彼自身の武将達(umarā')を派遣し迎撃させたが、彼自身は夜半に要塞(qal'a)から抜け出し、カルマクの方へ逃げた。その結果、カーシュガルの国(mamlakat)はヌールゥッディーンに恩賜(soyūrghāl)された(TShM, p. 88)。この恩賜の後、アブドゥッラーはヨルバルスに対しケリヤ付近に遠征し、カルマクのセンゲに支援されたヨルバルスは父を撃退したが。ヌールゥッディーンは暫くして病没し、カーシュガルにおいてキプチャクQipchāq、チョン・バ

ギシュ Jōng Bāgīsh⁴²⁾とカーシュガルの人々との間に激しい対立が生じた。 とかくするうち、ヨルバルスは Ajūrtū⁴³⁾の援助でカーシュガルの要塞を攻 めに来たが、望みを失い引き返した(TShM, p. 90)。

かくの如く,アブドゥッラーはヨルバルスをカーシュガルから追い出したものの,カーシュガルの情勢は不安定であった。前述の如く,東方ジャーリーシュ,ユルドゥズ方面においても,イブラーヒーム,イスマーイール両兄弟がカルマク勢を背景に長兄アブドゥッラーの軍事力を凌駕する勢力になっていた。この様な状況の下,アブドゥッラーは逃亡を考え,メッカ Makkaへ旅する用意をし,2千人に近いキルギズの軍をヨルバルス追跡に派遣して,ヒンドゥースターン Hindūstān へ向かった (TShM, pp. 90, 91)。彼がカシュミール Kashmīr を経て,ムガール朝君主アウラングゼーブの許に到着したのは,ヒジュラ暦1078年 shawwāl 月8日/西暦1668年3月22日の事であった⁴0。

(4) ミールザー・サイフゥッラー・チョラス

I章で論じた「敕令」によってYārbālīgh幹渠の1枝渠の水を恩賜され、 土地の私有権を認められたサイフゥッラー・ベグ・チョラスの政治的位置 づけを行なう。この人物が《シャー・マフムードの歴史》に登場している 事を示そう。

1666年4月にアブドゥッラー・ハーンがヨルバルスの叛乱企図に対して 2人のベグとヨルバルスの息子・娘を殺害し、ヌールゥッディーンと共に カーシュガルのヨルバルスに向けて進軍した事は前述の通りである。シャ ー・マフムードはこの行軍とカーシュガルから**の**迎撃の有様を次の通り記 録している。

ヌールゥッディーンとその軍はアブドゥッラー・ハーンの武将達(umarā') の一団と共にキジル Qïzīl の道へ [ヤールカンドから] 向かった。 [ア

ブドゥッラー・] ハーンと大貌下 (Hadrat-i 'Azīzān) [=Khwāja Muhammad 'Abd Allāh] は下手の道を騎行した。シーグ村 (qarya-yi Sīg) に着いた時,Darwīsh Muhammad Yasāwul を数名の者と共に殺した。カーシュガルから Mīrzā 'Alī Shāh Bēgchīk,Mīrzā Sayf Allāh Chorās,Yāmghūrchī Beg Sāghrīchī が多数の一団と共にヌールゥッディーン・ハーンの道を遮った,との知らせがヌールゥッディーン・ハーンに届いた (TShM, p.88)。

カーシュガルからヌールゥッディーンに立向かった者共の中にミールザー・サイフゥッラー・チョラスなる人物が見える。人物名と部族的集団名の一致と時期・場所の状況から考えて,この人物が1662年9月―10月にカーシュガル地方で発布された「敕令」のサイフゥッラー・ベグ・チョラスと同一人である事は明白である。尚,前者にベグ号が附されていないのは,前者と共に名を挙げられているミールザー・アリー・シャー・ベグチクが,《シャー・マフムードの歴史》の他の箇所で 'Alī Shāh Beg Bēgchīk, 'Alī Shāh Begと呼ばれ (TShM, p. 95),ここでベグ号が落とされているのと同じ事情であろう。《シャー・マフムードの歴史》において Chorās,Bēgchīk等の部族的集団名が人名の後に附される代わりにベグ号が落とされる例は枚挙に遑がない。

《シャー・マフムードの歴史》はサイフゥッラー・チョラスについてこれ以外の記録を残していない。彼がこの事件の前後にどんな活動を行ない、如何なる経歴を辿ったかは、今のところ知られない。判明している事実は、1662年のヨルバルスの「敕令」によって1枝渠の水を恩賜され、土地の私有権を認められた事と、アブドゥッラー、ヌールゥッディーン父子のヨルバルス攻撃に対してカーシュガルから迎撃した事とである。しかし、その事実は、ヨルバルスのカーシュガルにおける法的権威によって経済的利益を得た彼が現実にヨルバルスと軍事的に結び付いていた事を明示するもの

であり、「敕令」の効力を実証ずるものであると言えよう。

おわりに

以上筆者は、そこに現れるベグ職名や特殊用語の検討などの研究⁶⁰を除いては等閑に付されて来た感がする1662年の「敕令」についてその歴史的位置づけを試みた。それと共に《シャー・マフムードの歴史》に拠り、当時の政治情況を明らかにした。

アブドゥッラー・ハーンの敕令に従い、その子ヨルバルスにより発布された「敕令」は当時のカーシュガル・ハーン家の法的権威の実在を具体的に示している。「敕令」により経済的利益を得たサイフゥッラー・チョラスなるベグがヨルバルスに軍事奉仕している事実は、ハーン家権力を支えた社会的基盤が何であったかを想定させるに十分である。政治史上で言えば、「敕令」発布時はヨルバルスがアブドゥッラーから離叛する数年前に当たり、既にイブラーヒーム、イスマーイール両兄弟がカルマク勢と接触している頃だった。

「敕令」の内容自体については不十分にしか論及できなかったが、それが 保証した一ベグの経済的利益の分析と当該地域の住民に与えた影響などに ついては、内容のより一層の検討と相俟って後考に譲りたいと思う。

注

- 1) 佐口 透「トルキスタンの諸ハン国」『岩波講座世界歴史』13,岩波書店, 1971,70頁,注5;間野英二『中央アジアの歴史』講談社,1977,192-193 頁参照。
- 2) В. П. Юдин, О. родоплеменном составе Могулов Могулистана и Могулии и их этнических связях с Казахским и другими соседними народами, «Известия Академии наук Казахской ССР», Серия общественных наук, Алма-Ата, 1965, No. 3, стр. 52-65. «Материалы по истории Казахских

ханств XV-XVIII веков), Алма-Ата, 1969 (以下 МИКХ と略称), стр. 369-385.

 «Шах-Махмуд ибн Мирза Фазил Чурас Хроника», Критический текст, перевод, комментарии, исследование и указатели О. Ф. Акимушкина, Москва. 1976.

《シャー・マフムードの歴史》のARMYIIIRIH 氏校訂テキストからの引用ページを TShMの略号で示す。尚,当史料は本田實信氏・濱田正美氏・堀川徹氏を中心とする「チョラス史研究会」により,その前半部の邦訳刊行が準備されている。筆者は当研究会に参加し,メムバー諸氏より種々の御教示を得た。ここに謝意を表する次第である。

- 4) Акимушкин, Указ. соч., стр. 63-64.
- 5) Там же, стр. 42-43, 59-60.
- 6) クシュ・ベギは「主猟官」, ウチ・ベギは「翼軍のベグ」である (MUKX, orp. 370, 脚注 4) が, この場合の職務内容は不明である。なお, 前者をコシュ・ベギ「本営のベグ」と読む見解もある (MUKX, orp. 370)。
- 7) G. Raquette, Eine Kaschgarische Wakf-Urkunde aus der Khodscha-Zeit Ost-Turkestans, Lund und Leipzig, 1930.
- 8) *Ibid.*, S. 3.
- 9) *Ibid.*, SS, 4-6.
- 10) Friedrich Giese, Bemerkungen zu G. Raquette: Eine Kaschgarische Wakfurkunde aus der Khodscha-Zeit Ost-Turkestans, *Ungarische Jahrbücher*, Bd. XI, Heft 3, Berlin und Leipzig, 1931, SS. 277-283.
- 11) А. К. Боровков, Вакуфная Грамота 1812 г. из Кашгара, «Археографический ежегодник за 1959 год», Москва, 1960, стр. 345-346.
- 12) 「敕令」の右上隅に Hadrat-i Sultāngha, そしてその語の下方に shāhāna, khusrawāna, bizと書き込みがあるが, これらと「敕令」の内容とは関連がない (Raquette, op. cit., SS. 7-8.)。
- 13) Ḥaḍrat-i Khān dadam yarlighidin Abū al-Ghāzī Yōlbārs Bahādur Khān Ghāzī sözüm. (「敕令」 1 2 行目)。Raquette氏は dadamを「我が父 (Mein Vater)」(Raquette, op. cit., S. 18)と, Giese氏は「我が祖父 (mein Großvater)」(Giese, op. cit., S. 278)と訳す。dadaはfather, papa と解すべきであり、前者の訳語を支持する(G. Jarring, An Eastern Turki-English Dialect Dictionary, Lund, 1964, p. 79参照)。この問題については、間野英二氏の御教示を得た。記して謝意を表する。

- 14) В. В. Бартольд, Отчет о командировке в Туркестан, 《Сочинения》, т. VIII, Москва, 1973, стр. 199-203 に「シグナクの敕書」の第1から第4文書までのテキストとその解説が載せられ, МИКХ, стр. 317-319 にВ. П. Юдин 氏により露訳されている。後者は Tārtkh-i Amnīya, Bibliothèque Nationale, Collection Pelliot, В 1740, fol. 186а-187а; Н. Н. Пантусов, 《Таарих-и Эмэние》, Казан, 1905, стр. 289-290 に挙げられ, 同じくЮдин氏の露訳がある(МИКХ, стр. 488-490)。なお、 Tartkh-i Amnīyaペリオ本は濱田正美氏の御好意により所蔵のマイクロコピーを複写利用し得た。 謝意を表する次第である。以下にこれらの文書の表題を示しておく。丸括弧内はその文書に記された発布時・場所である。
 - (803 A. H. 1400-01 A. D., Sīghnāq)
 Abū al-Ghāzī Amīr Tīmūr Khān Bahādur Sultān sözümiz.
 - 2. (950 A. H./1543-44 A. D., Sīghnāq) Abū al-Ghāzī 'Abd al-Rahīm Khān Bahādur Sultān sözümiz.
 - 3. (jumādī al-thānī 1006 A. H. / 1598 A. D.) huwa al-hayy. Abū al-Ghāzī 'Abd Allāh Khān Bahādur Sultān sözümiz.
 - 4. ('ashūr 1044 A. H./1634 A. D., Sīghnāq) Abū al-Ghāzī 'Ubayd Allāh Bahādur Sultān sözümiz.
 - (ṣafar 945 A. H./1538 A. D., Samarqand)
 Abū al-Ghāzī 'Ubayd Allāh Bahādur Khān sözimiz.
- 15) О. Д. Чехович, «Самаркандские документы XV-XVI вв.», Москва, 1974, стр. 37.
- 16) 注14) のトランスクリプション参照。
- 17) Raquette, op. cit., S. 9.
- 18) muhrluq nishān-i 'ālī-shān tārīkh ming yetmish üch aṭ yïlï ṣafar ayï dār al-salṭana Kāshghar wilāyatīda bitildi. (「敕令」22行目, Raquette 氏校訂テキスト op. cit., S.16)。
- 19) Raquette, op. cit., SS. 3-4.
- 20) Giese, op. cit., SS. 281, 283.
- 21) Боровков, Указ. ста., стр. 345.
- 22) Yārbālīgh östängidin bir arīq su soyūrghāl qīlduq. wä taqī bir qit'a yer-i ma'lūm al-ḥudūd wa al-fawāṣil, ki aban 'an jaddin milkī kelip turur, taqī milklikini qabūl qīlīp, wä musallam tutup, [waqf qīlīp]

berdük. (「敕令」14—15行目)。**Боровков**氏が指摘したように, [waqf qïlïp] は異なる筆跡で記されており,後世の改ざんと思われる(**Боровков**, Указ. ота., стр. 345)。östäng (ustāng) と ar ïq に関しては,堀直「清代回疆の水利灌漑——19~20世紀のヤールカンドを中心として——」『大手前女子大学論集』第14号,1980,74-75頁参照。

- 23) Raquette, op. cit., S.22, Anm. 1.
- 24) Giese, op. cit., S. 280, S. 280, Anm. 4.
- 25) Fuad Köprülü, (Bibliyografya) Eine Kaschgarische wakf-urkunde aus der Khodscha-zeit ost-Turkestan (G. Raquette), Vakiflar Dergisi, Sayı, I, Ankara, 1938, р. 159. Боровков, Указ. ста., стр. 345.
- 26) Eiji Mano, Moghūlistān, Acta Asiatica, 34, Tokyo, 1978, pp. 47, 51, 59.
- 27) О. Д. Чехович, Указ. соч., стр. 37-38.
- 28) Там же, стр. 311.
- 29) 注14)のトランスクリプション参照。
- 30) O. Ф. Акимушкин, Указ. соч., стр. 211 の露訳参照。尚,彼の laqabは Khwāja Shādīであり、彼は Khwāja Muḥmmad Isḥāq の第3子として生まれ、ヒジュラ暦1055/西暦1645-46年に逝去した(TShM, p.70)。
- 31) Акимушкин, Указ. соч., стр. 309, 注 278所引。
- 32) 『國朝耆獻類徵初編』 巻首所収。
- 33) 羽田 明「明末清初の東トルキスタン――その回教史的考察――」『東洋史 研究』7-5,1942,12頁;佐口 透「チャガタイ・ハン家の末裔と清朝」『東 西文化交流史』雄山閣,1975,367頁。
- 34) 同じく克拜の言葉として「阿布勒阿哈默特汗居吐魯番,先二年卒」とある。 阿布勒阿哈默特汗,すなわち Abū al-Muhammad Khānが死んだのはヒジュ ラ暦1066年/西暦1655年10月31日~1656年10月19日と伝えられている(TShM, p.76)。両者の紀年が食い違っているのは不可解であるが,今のところ,い ずれが正しいのか断定できない。
- 35) ホショットのオチルトゥ・チェチェン・ハーンの子である(Акимушкин, укав. соч. стр. 316, 注323)。
- 36)《シャー・マフムードの歴史》では、ハーンとなった人物は即位以前でもハーンと呼称されている。
- 37) Акимушкин, Указ. соч., стр. 233 の露訳参照。尚, 彼はホージャ・ムハンマド・ヤフヤーの長子である (TShM, p. 70)。
- 38) Anīs al-Ṭālibīn, Акимушкин 氏校訂テキスト(Указ. соч.) стр. 339; Ms. Ind. Inst. Pers. 45, fol. 103 b.

- 39) Yōālbārs (sic) Khān atasīnīng sözigä kirmäy, gustākhlīq qīlur erdi. Khwāja Muḥammad Yūsuf bilä Khwāja Āfāqgha bisyār i'zāz ikrāmlar qīlur erdi. (British Museum, OR. 5338, fol. 11b; Institut de France, ms. 3357, fol. 20a) 両写本は濱田正美氏の御好意により、所蔵のマイクロコピーを複写利用し得た。謝意を表する次第である。尚、Tadhkirat al-Jahān は所謂 Tadhkira-yi Khwājagān (あるいは、Tadhkira-yi 'Azīzān) の正式の題名である (Masami Hamada, Islamic Saints and Their Mausoleums, Acta Asiatica, 34, Tokyo, 1978, p. 90, footnote, 48)。
- 40) Акимушкин, Указ. соч., стр. 227 の露訳参照。
- 41) Акимушкин, Указ. соч., стр. 318, 注334 所引の《カーシュガル史》。
- 42) キプチャクとチョン・バギシュはキルギズの部族(племя) である(М.А. Салахетдинова, Сочинение Мухаммад-Садыка Каштари "Тазкира-и ходжаган" как источник по истории киргизов, 《Известия Академии наук Киргизской ССР》, том 1, вып. 1, Фрунзе, 1959, стр. 98)。
- 43) 校定テキストに AJWRTWと表記されている。 Чимитдоржиев 氏はこの人物をホショットのオチルトゥ・ハーン (オチルトゥ・チェチェン・ハーン) と見做している (Ш. Б. Чимитдоржиев, 《Вваимоотношения Монголии и Средней Азии в XVII-XVIII вв.》, Москва, 1979, стр. 13)。恐らく, その同定は正しいであろう。
- 44) Акимушкин, Указ. соч., стр. 318, 注338 参照。 *ʿĀlam-gīr Nāma*, Calcutta, 1868, pp. 1064-65.
- 45) Акимушкин, Указ. соч., стр. 236 の露訳参照。
- 46) 嶋田襄平「ホーヂャ時代のベク達」『東方学』第3輯,1952,71-74頁。同氏「清代回疆の人頭税」『史学雑誌』61-11,1952,36頁,注11)。久保田文次「清代東トルキスタン農業問題に関する一試見——佐口 透氏の所説について——」『史潮』71号,1960,37-43頁。佐口 透 『18—19世紀東トルキスタン社会史研究』吉川弘文館,1963,117-118頁。同氏,前掲論文,62頁。 堀氏,前掲論文,73-74頁は水利灌漑との関連で内容に触れている。

[付記] 本稿は1981年8月25日にアジア文化研究会・若手ユーラシア研究会・ 北陸ユーラシア研究会合同合宿において口頭発表したものである。席上諸氏 より有益な助言を頂いた。ここに謝意を表したい。

(大学院学生)